

助動詞1(る・ゐる・する・さす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り)

学習時間のめやす 30分

今回から三回にわたって助動詞について学んでいく。日本語では、話し手・書き手の考え・思い・意向等の決定は助動詞によって多く表される(「我、かしこに行きぬ」「我、かしこに行かず」。古典文法において助動詞はとりわけ大切なものであるから、しっかりと理解しておいてほしい。各々の助動詞については、

- (1) どんな品詞や活用形につくのか【接続】
 - (2) どんな語変化をするのか【活用】
 - (3) どのような意味を表すのか【意味】
- の三点についてマスターすること。



【接続】「る」 ↓四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に付く。

「ゐる」 ↓右以外の動詞の未然形および助動詞「す・さす・しむ」の未然形に付く。

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

【活用】 動詞の下二段活用と同様な活用をする。 【下二段型】

【意味】 現代語の「れる・られる」に相当する。

①自発(自然ト……レル……セズニハイラレナイ)

ありし母の姿ぞ思ひ出でらるる。
(生前の母の姿が自然と思ひ出される。)

。「思ひ出づ」「偲ぶ」「おどろく」など、心の動きを表す語につくことが多い。

②受身(〜ニ……サレル)

ある人に誘はれ奉りて、月見ありくこと侍りし。
(「私は」ある人に誘われもうしあげて、月を見てまわる事がありました。)

。主語(例文では「私」と「る・らる」のつく動詞の動作行為者(例文では「誘ふ」ことをする「ある人」とが異なる。なお、古文では、無生物が受身文の主語になることはほとんどない。

③可能(……デキル)

恐ろしくて、つゆまどろまれず。
(恐ろしくて、少しもとうとうと眠ることができない。)

。下に打消を伴うか、反語文で用いられるのが普通である。

④尊敬(……ナサル・オ……ニナル)

おぼつかなくおぼしめさるる事どもなど問はせ給ひて
(「帝が」不審にお思いになることなどをお尋ねになつて)

。尊敬語につくのが原則であるが、鎌倉時代以後は単独で尊敬を表す「る・らる」もでてくる。なお、「れ給ふ・られ給ふ」の「る・らる」は尊敬ではなく、受身か自発である。

例題

一、次の空欄に助動詞「る・らる」を正しく活用させて入れよ。

(1) さる程に夜も明けければ、大將いとま申しつつ福原へこそ
帰ら a けれ。

(2) 親、はらからの中にも、思は b 思は c ぬがあるぞ
わびしきや。

(3) かの大納言、いづれの船にか乗ら d べき。

二、次の傍線部の助動詞「る・らる」の意味を記せ。

(1) 舎人が寝たる足を狐に食はる。

(2) 鼎 抜かむ とするに、おほかた 抜かれず。

(3) 新大納言けしき変はりて、さつと立たれ けり。

(4) 今日 は 都のみぞ思ひや らるる。

解説

一 a 四段動詞「帰る」につくので「る」、助動詞「けり」が下接しているので連用形。b c はともに四段動詞「思ふ」につくので「る」、b は下に「者」が省略されて「愛される者」の意となるので連体形、c は打消の「ず」の連体形「ぬ」が下接しているので未然形となる。d 四段動詞「乗る」につくので「る」、助動詞「べし」が下接しているので終止形となる。e 下二段動詞「寝」につくので「らる」、「ず」が下接しているので未然形となる。

二 (1) 「食ふ」のは舎人ではなく狐だから受身。(2) 下に打消の「ず」もあり、「まったく抜くことができない」の意となるから可能。(3) 「立つ」のは貴人である「大納言」であるから尊敬。(4) 「思ひやる」という心情を表す語につき、この人自身が「思ひやる」ので自発。

全訳

一 (1) そうしているうちに夜も明けたので、大將は暇乞いを申し上げて福原へお帰りになった。
(2) 親、兄弟姉妹の中でも、愛される者、愛されない者がいるのはつらいことであるよ。

二 (1) 舎人が寝ていて足を狐に食われたらどうか。
(2) 鼎を抜こうとするが、まったく抜くことができない。
(3) 新大納言は顔色が変わって、さつとお立ちになった。
(4) 今日 は 都のことばかりが自然と思ひやられる。

1章

助動詞 1 (る・らる・す・さす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り)

解答

- 一 a れ b るる c れ d る e られ
 二 (1) 受身 (2) 可能 (3) 尊敬 (4) 自発



す・さす・しむ

【接続】「す」 ↓四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に付く。

「さす」 ↓右以外の動詞の未然形に付く。

「しむ」 ↓用言の未然形に付く。

【活用】【下二段型】

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

【意味】現代語の「せる・させる」に相当する。

①使役(……サセル)

馬に水を飲ます。(馬に水を飲ませる。)

。主語と「す・さす・しむ」のつく動詞の動作行為者が異なる。

②尊敬(……ナサル・オ……ニナル)

中宮は御歳二十二にならせ給ふ。

(中宮はご年齢が二十二歳におなりになる。)

。尊敬は、(1)直後に尊敬語がある、(2)主語と動作行為者が同じである、という二つの条件をともに満たしている場合である。次の例も(1)は満たすが(2)は当てはまらないので「使役」となる。

大将、童に門を守らせ給ふ。

(大将は、童に門を守らせなされる。)

。「のたまはす・給はす・参らす・奉らす・きこえさす」等のように、「す・さす」の直前に尊敬・謙讓の動詞がある場合は、それとともに一語の動詞とするのが原則である。

例題

一、次の空欄に助動詞「す・さす」を正しく活用させて入れよ。

(1)月の光を御覧じてぞ、慰ま **a** 給ひける。

(2)この子いと大きになりぬれば、名を三室戸齋部の秋田を呼

びてつけ **b**。

(3)あゆみ疾うする馬をもちて走ら **c**、迎へ **d** 給ふ。

二、次の傍線部の助動詞「す・さす」の意味を記せ。

(1)人おびやかさむとて、けおそろしう思は a するならむ。

解説

- (2) 上御覧じて、いみじう驚か(b)せ給ふ。
- (3) 殿ありか(c)せ給ひて、御隨身召して、遣水はらは(d)せ給ふ。

一 a 未然形がア段音で終わっているので四段動詞とわかる「慰む」につくので「す」、直後の用言「給ひ」に係るので連用形になる。b 未然形がエ段音で終わっているの下二段動詞とわかる「つく」につくので「さす」、係り結びのない文の文末にあるので終止形になる。c 四段動詞「走る」につくので「す」、直後に読点があり、これ以後の部分に係っていくかたちなので連用形(これを連用中止法という)。d 下二段動詞「迎ふ」につくので「さす」、直後の用言「給ふ」に係るので連用形になる。

二 (a)直後に尊敬語がないので使役。(b)直後に尊敬語の「給ふ」があり、「驚く」のも主語の「上」であるから尊敬。(c)直後に尊敬語の「給ひ」があり、「ありく」のも主語の「殿」であるから尊敬。(d)「はらふ」のは主語と異なる「御隨身」なので使役。

全訳

- 一 (1)月の光をご覧になって、お気持ちを感じなされた。
(2)この子がとても成長したので、名前を三室戸齋部の秋田を呼び寄せて付けさせる。
- 二 (3)走るのが速い馬を使って走らせて、お迎えなさる。
(1)人をおびえさせようとして、恐ろしい感じに思わせようとするのであろう。

1章

助動詞 1 (る・らる・す・さす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り)

- (2) 天皇はご覧になって、たいそう驚きなさる。
- (3) 殿は歩き回りなさって、御隨身をお呼びになって遣水を掃除させなさる。

解答

- 一 a せ b さす c せ d させ
- 二 (a)使役 (b)尊敬 (c)尊敬 (d)使役

き・けり

き

【接続】活用語の連用形に付く。ただし、カ変・サ変動詞には、同音接続(「きき」「しし」など)を避けるために、場合によっては未然形に接続するなど、特別な接続をする。

【活用】【特殊型】

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	(せ)	○	き	し	しか	○

* 未然形「せ」は反実仮想の「……せば……まし」の形のみである。

【意味】
過去（……夕）

京より下りしとき、みな人、子どもなかりき。
（京から下った時に、人々は皆、子どもはいなかった。）

。主に、自身で実際に体験・見聞した直接経験の回想を表す。

けり

【接続】活用語の連用形に付く。

【活用】ラ変動詞と同様な活用をする。【ラ変型】

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

*未然形「けら」は、上代にのみ用いられた形である。

【意味】

①過去（……夕）

大きな榎えのきのありければ、人、榎の僧正とぞ言ひける。
（大きな榎があったので、人々は榎の僧正と言った。）

。主に、他人から伝聞したような間接経験の回想を表す。

②詠嘆（……タコトヨ……ナア）

霞立ち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける
（霞が立ち木の芽もふくらむ春に雪が降ると、まだ花が咲かない里も花が散ったように見えることだなあ）

。和歌の中の助動詞「けり」は詠嘆と考えてよい。

例題

次の文から助動詞「き・けり」を抜き出し、その活用形を記せ。

- (1) 一年ごろ、ものにまかりたりしに、いと暑かりしかば
- (2) かぎりとして別るる道の悲しきに生かまほしきは命なりけり
- (3) 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
- (4) 昔、男ありけり。身は卑しながら、母なむ宮なりける。

解説

(1) 「まかりたりしに」の「し」が、助動詞「たり」の連用形になっているので、助動詞「き」の連体形。また、「暑かりしかば」の「しか」が、形容詞「暑し」の連用形「暑かり」についているので、助動詞「き」の已然形と判断できる。

(2) 「命なりけり」の「けり」が、断定の助動詞「なり」の連用形になっているので、助動詞「けり」の終止形。和歌中にあるので、詠嘆の用法である。「悲しき」は、形容詞「悲し」の連体形で、「き」は助

1章

助動詞「る・らる・す・なす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り」

動詞ではない。また、「生かまほしき」は、四段動詞「生く」の未然形「生か」に「……(し)たい」の意となる助動詞「まほし」の連体形「まほしき」がついたもので、「き」は過去の助動詞ではない。

(3) 「なかりせば」の「せ」が、形容詞「無し」の連用形「なかり」につき、「せば……まし」の形なので、助動詞「き」の未然形である。

(4) 「ありけり」の「けり」が、ラ変動詞「あり」の連用形についているので、助動詞「けり」の終止形。また、「なりける」の「ける」が、断定の助動詞「なり」の連用形についているので、助動詞「けり」の連体形。文末にあるのに連体形であるのは、係助詞「なむ」が係りとなり「ける」がその結びとなったためである。

全訳

- (1) ある年、ある所に参りましたところ、とても暑かったので
- (2) もうこれまでと別れる(死出の)道の悲しさにつけても、生きていたいの命であることなあ。
- (3) この世にまったく桜がなかったならば、春の(人の)心はどんなにのんびりしたであろうのに
- (4) 昔、ある男がいた。身分は低いけれども、その母は宮様であった。

解答

- (1) 「し」連体形・「しか」已然形 (2) 「けり」終止形
- (3) 「せ」未然形 (4) 「けり」終止形・「ける」連体形



つ・ぬ・たり・り

つ・ぬ

【接続】活用語の連用形に付く。

【活用】「つ」「ぬ」下二段動詞と同様な活用をする。【下二段型】

「ぬ」ラ変動詞と同様な活用をする。【ナ変型】

ぬ	つ	語例	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
な	て							
に	て							
ぬ	つ							
ぬる	つる							
ぬれ	つれ							
ね	てよ							

【意味】

①完了(……タ……テシマッタ)

送りに来つる人々、これより皆帰りぬ。
(見送りに来た人々は、ここから全員帰った。)

②強意(確述・確認)(キット……確力ニ……)

風も吹きぬべし。(風もきつと吹くだろう。)

。「つ」「ぬ」が強意となるのは、直後に推量系助動詞(む・らむ・べし等)がある場合と、「つ」「ぬ」が命令形の場合。

たり・り

【接続】「たり」↓活用語の連用形に付く。

「り」 ↓四段動詞の命令形(已然形)とサ変動詞の未然形に付く。

【活用】ともにラ変動詞と同様な活用をする。【ラ変型】

語例	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
り	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
ら						
り						
り						
る						
れ						
れ						

【意味】

①完了(……夕)

雪の降りたる朝、^{あした}出立せり。

(雪が降った朝に、出発した。)

②存続(存在・継続)(……テアル……テイル)

常よりももの思ひたるさまなり。

(いつもよりも物思いに沈んでいる様子である。)

。「たり」「り」の基本的意味は存続であり、完了の意味となるのは、「猫、人に飛びつきたり」のように、瞬間的一回の動作

行為を表す動詞に付いた場合や、「去年、雪多く降り」のように、その結果に着目し関心が向けられている場合となる。ただし、「……である・ている」と訳すよりも「……た」と訳すのが妥当な場合は完了だと考えてよい。

例題

一、次の文から助動詞「つ・ぬ・たり・り」を抜き出し、その活用形を記せ。

(1) 行き行きて、駿河の国に至りぬ。

(2) 雨はやみたれど、風なほ吹きて舟出ださず。

(3) 道知れる人もなく、まどひ行きけり。

(4) 竜あらばふと射殺して首の玉は取りてむ。

二、次の傍線部を文法的に説明せよ。

(1) 前の年、かくのごとくからうじて暮れぬ。

(2) 日数のはやく過ぐるほどぞ物にも似ぬ。

(3) さば早う都へ帰らせ給ひぬ。

(4) 細かにこそあらねど、時々もの言ひおこせけり。

(5) 古人も多く旅に死せるなり。

(6) 大臣、文をつかはさる。

解説

一 (1) 「至りぬ」の「ぬ」が、四段動詞「至る」の連用形になっているので、助動詞「ぬ」の終止形。「行きて」の「て」は、直後に用言

や助動詞がないので助動詞「つ」の未然形や連用形ではなく接続助詞の「て」。「国に」の「に」は、体言「国」についているので助動詞「ぬ」の連用形ではなく、格助詞の「に」。

(2) 「やみたれど」の「たれ」が、四段動詞「止む」の連用形についているので、助動詞「たり」の已然形。「吹きて」の「て」は接続助詞。

(3) 「知れる人」の「る」が、四段動詞「知る」の命令形についているので、助動詞「り」の連体形。

(4) 「取りてむ」の「て」が、四段動詞「取る」の連用形につき、また、未然形に接続する助動詞「む」も下接しているので、助動詞「つ」の未然形。推量系助動詞「む」が直後にあるので、この「て」は強意の用法である。「射殺して」の「て」は接続助詞。

二 (1) 「ぬ」となる助動詞には、連用形に接続する完了・強意の「ぬ」の終止形と、未然形に接続する打消の「ず」の連体形がある。直前に下二段動詞「暮る」があるが、「暮る」は未然形・連用形がともに「暮れ」となるので、直前のみでは「ぬ」の識別はできないが、係り結びのない文の文末なので活用形が終止形とわかるから、完了の「ぬ」と判断できる。

(2) 未然形・連用形が同形の上一段動詞「似る」についているので直前からはわからないが、係助詞「ぞ」の結びで連体形になるので打消の「ず」と判断できる。

(3) 四段動詞「給ふ」の連用形「給ひ」についているので、助動詞「ぬ」の命令形。

(4) ラ変動詞「あり」の未然形「あら」についているので、打消の助動詞「ず」の已然形。

全訳

(5) サ変動詞「死す」の未然形「死せ」についているので、助動詞「り」の連体形。

(6) 四段動詞「つかはす」の未然形「つかはさ」についているので、助動詞「る」(ここでは尊敬の意)の終止形。

一 (1) 行き続けて、駿河の国に到着した。

(2) 雨は止んだけれども、風がやはり吹いて舟を出さない。

(3) 道を知っている人もなく、迷いながら行った。

(4) もし童がいるならば、たやすく射殺して首の玉をきつと取るう。

二 (1) 前年は、このようにやつと終わった。

(2) 日々が速く過ぎる度合いは他に比べるものもない。

(3) それでは早く都にお帰りなさってください。

(4) 細々と(愛情深く)はないけれども、時々ものを言って寄越した。

(5) 昔の人も多く旅の途上で死んだのである。

(6) 大臣は、手紙をお与えになる。

解答

一 (1) 「ぬ」終止形 (2) 「たれ」已然形

(3) 「る」連体形 (4) 「て」未然形

二 (1) 完了の助動詞「ぬ」終止形 (2) 打消の助動詞「ず」連体形

(3) 強意の助動詞「ぬ」命令形 (4) 打消の助動詞「ず」已然形

(5) 完了の助動詞「り」連体形 (6) 尊敬の助動詞「る」終止形

1章

助動詞「る・らる・す・さす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り」

これだけは覚えよう！

重要古語のまとめ ①

もしも君が「古文も結局は日本語だから、特別に単語を覚えなくてもなんとかなる」と思っているなら甘い。日常生活では用いない古文は、外国語のようなものだ。英文読解に文法と英単語の知識が欠かせないように、古文においても文法と同時に「古語」の学習が不可欠なのである。

○語彙は多いほど有利？

確かに、多くの言葉を知っているほうが文章をすらすらと読むのに便利である。だからと言って古語辞典を丸暗記しても無駄が多い。限られた時間内に効率よく学習するために、重要な古語・よく出る意味にしぼって勉強しよう。市販されている単語集を使うのも便利だ。

○こんな古語がねらわれる

現代とほぼ同じ意味の古語については、いちいち意味を問うまでもない。「現代語にはない古文特有の言葉」「現代と意味が異なる言葉」、そして文脈判断力を必要とする「多義語」がねらわれやすい。そこでこのコーナーでは、これらの重要語の中でも特に重要なものにしぼって取り上げる。

今回のテーマ 「古文特有語」

- ① 表を見て各単語の意味を確認する。
* テストでよく問われる主要な意味を中心にまとめています。
【対】対義語 【類】類義語 【関】関連語・関連表現
- ② 意味を覚えたら□に印をつける。
- ③ 印がついていない□がなくなるまで、何度も繰り返し学習する。
- ④ 確認テストで知識を定着させる。余裕があれば難読語ミニテストにも取り組んで、語句の知識を増やそう。

<p>あいなし □□□ ク活用形容詞</p>	<p>① 不都合だ・つまらない・よくない ② むやみに・わけもなく * ②は連用形「あいなく(あいなう)」の場合に限る用法</p>
<p>あし □□□ シク活用形容詞</p>	<p>【悪し】 悪い【対】よし【類】わろし * 「悪しーわろしーよろしーよし」をまとめて覚える</p>
<p>あてなり □□□ ナリ活用形容動詞</p>	<p>【貴なり】 身分が高い・上品だ 【対】あやし・いやし 【類】やむごとなし</p>
<p>あながちなり □□□ ナリ活用形容動詞</p>	<p>① 強引だ・無理だ ② 一途だ ③ 程度がはなはだしい</p>
<p>あふ □□□ 動詞</p>	<p>【会ふ・逢ふ】 ① 男女が関係を結ぶ ② 結婚する</p>

1章

助動詞1(る・らる・す・なす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り)

副詞 いとど <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	シク活用形容詞 いとけなし <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	副詞 いつしか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	動詞 ありく <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	シク活用形容詞 あらまほし <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	副詞 あまた <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
ますます・いつそう 闊いと(副詞)・いとどし(シク活用形容詞)	【幼げなし】 あどけない・子どもっぽい 類 いはけなし 対 大人し	①いつ……か ②いつか・いつだったか ③いつの間にか ④さつそく・早く 闊いつしか……(願望の表現) 早く……(したい)	【歩く】 あちこち動き回る・移動する 闊ありき(名詞)	理想的だ・好ましい・望ましい 闊まほし(願望の助動詞) *「あらまし(計画・概略)」との区別に注意	【数多】 数多く・たくさん 類 こころ・そこら・そこぼく

動詞 おきつ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	シク活用形容詞 うるはし <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	名詞 うつつ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	副詞 うたて <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	シク活用形容詞 うし <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	動詞 いらふ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
【掬つ】 ①あらかじめ決めておく ②指図をする・命令する	【美し・麗し】 ①美しい・立派だ ②端正だ 闊うつくし かわい	【現】 ①現実 ②正気 対 夢 闊うつし(シク活用形容詞)・うつせみ(名詞)	いやだ 類 うたてし・いとほし	【憂し】 つらい・わずらわしい 類 心憂し・辛し・わびし	【答ふ・応ふ】 答える・返事をする 闊いらへ(名詞) 答え・返事

動詞 かきくらす □□□□	動詞 おろかなり ナリ活用形容動詞 □□□□	動詞 おこなふ □□□□	動詞 おこたる □□□□	動詞 おこす □□□□	動詞 おくる □□□□
悲しみにくれる * 「暮らす」ではない 【掻き暗す】	【疎かなり】 おろそかだ・いいかげんだ 【闊言ふもおろかなり】 * 「愚かだ」の意味もあるが、まず問われない	【行ふ】 仏道を修行する（読経する・勤行する） 【行ひ（名詞）】 * 仏道修行・勤行	【怠る】 病気がよくなる 【困なやむ・わづらふ】	【遣す】 むこうからこちらへよこす 【困やる】	【後る】 ①先に死なれる・取り残される ②他のものより劣る 【闊後らす（他動詞）】

シク活用形容詞 くちをし □□□□	動詞 かる □□□□	副詞 かたみに □□□□	ク活用形容詞 かたし □□□□	動詞 かしづく □□□□	動詞 かこつ □□□□
【口惜し】 ①残念だ ②つまらない	【離る】 疎遠になる * 「枯る」と掛詞になる場合がある	【互に】 互いに・かわるがわる * 「形見」ではない	【難し】 ①難しい・困難だ ②めったにない 【困①やすし】 【類①え……（打消）②ありがたし】	【傳く】 大切に世話をし育てる * 主従の間だけでなく、親子の間でも用いる	【託つ】 恨みに思う・愚痴を言う 【類わぶ】

確認テスト

次の各文の傍線部の意味をそれぞれ記せ。

(各2点)

- (1) いっしか梅咲かなむ。 || 梅が咲いてほしい。
 (2) 夢かうつつか寝てか覚めてか

得点

- || 夢なのか、それとも なのか、寝ていたのか、目覚めていたのか。
 (3) 貴なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしが
 など、

|| 男も身分が低い男も、どうかしてこのかぐや姫を手に入れたい、結婚したいと、

- (4) 家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、興あるものなれ。

|| 住居が似つかわしく、 ことは、興味深い。

- (5) 十二にて殿に後れ給ひしほど、|| 姫が十二歳で殿に なざつたとき、

- (6) 月ごろなやみわたるが、おこたりぬるもうれし。

|| 何か月も病気にかかっていたが、 たのもうれしい。

- (7) わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。

|| わづかに二本の矢であるのに、師匠の前で一本を しようと思
 うだろうか、いや、思うはずがない。

- (8) 女ども、末まで仲よき人難し。

|| 女友だちも、最後まで仲がよい人は 。

- (9) おのが君々の御事、かたみに語り合はせたるを聞くこそをかしけれ
 || 使用人たちが自分の主人のことを、 話し合っているのを聞く
 のはおもしろい。

1章

助動詞 1 (る・らる・す・さす・しむ・き・けり・つ・ぬ・たり・り)

- (10) 言はむ言葉もなく、口を閉ぢたる、いと口惜し。

|| 言う言葉もなく、口を閉じているのは、とても 。

難読語ミニテスト

次の(1)~(15)の読みを、すべて現代仮名遣いのひらがなで記せ。

- (1) 睦月 (2) 如月 (3) 弥生 (4) 卯月 (5) 皐月

(各2点)

- (6) 水無月 (7) 文月 (8) 葉月 (9) 長月 (10) 神無月

得点

- (11) 霜月 (12) 師走 (13) 望月 (14) 晦日 (15) 朔日

解答

確認テスト

- (1) 早く (2) 現実 (3) 身分が高い (4) 理想的である
 (5) 先に死なれ (6) 病気がよくなつ (7) いいかげんに
 (8) めつたにない (9) 互いに (10) 残念だ

難読語ミニテスト

- (1) むつき (2) きさらぎ (3) やよい (4) うづき (5) さつき
 (6) みなづき (7) ふづき (ふみづき) (8) はづき (9) ながつき
 (10) かなづき (11) しもつき (12) しわす (13) もちづき (14) つごもり
 (15) ついたち

* (1)~(12)は月の異名。(13)は満月、(14)は月末、(15)は月初め。

訓点・書き下し

学習時間のめやす 30分

諸君はこれから六回に分けて漢文を学習する。今回は、その第一回目にあたるため、漢文学習の心構えについて語ろうと思う。そもそも、「漢文」を成り立たせている漢字は表意文字で、一文字一文字に意味が込められている。したがって、

(a)男女衣著 悉如外人 黄髮垂髻 並怡然自樂 (『桃花源記』)

—— 男や女が着ているものは、すべてみな外部の世界の人たちと同じようであった。そして老人も子供たちも、おのがじし楽しそうにほがらかそうに暮らしている

右の例のように、わずかな文字数で多くを語るができる。

(b) いとなやましげに読みたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかな……つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。

一方、これは教科書でほとんどの人が目にする『源氏物語』『若紫』からの引用である。「和文」で人物の特徴を詳しく描写しようと思うと、この例のように、形容詞・形容動詞を羅列することになる。

(a)と(b)との比較から、漢文による描写の方が簡潔なものだということがわかる。しかし、だからといって、我々は、漢文を原文のまま引

用して理解することはできない。そこで理解するためのステップとして、(a)を「男女の衣著、悉く外人のごとし。黄髮垂髻して、並びに怡然として自ら楽しむ」のような訓読み(「書き下し文」にする(この漢字と仮名の交じり合った文の形を訓読文体と呼ぶ)。

日本語表現の特長

例文(a)に感ぜられる簡潔で張りのある表現、例文(b)から感得できるゆつたり流れるような文学空間——これらは、文章表現の上で互いに対立するものではなかった。この双方は、言わば、日本語による表現の車の両輪のようなものであった。二者の特長を生かし、それらを適切に塩梅あんばいして表現できることが、日本語表現の利点だったのである。

かつて、多くの先達は、訓読文体と和文体とを駆使し、さまざまな名表現を遺のこしてきた。名作と言われるものの表現には、必ず、この二つの文体の配分の妙が見られるのである。

ところが、「漢文教育」が国語の中で異様に貶おとしめられるようになり、年を追ってその比率が低下してきたという現状がある。先人が培ってきた日本語表現、その特長の半身を、削ぎ取られるような痛みを覚えずにはいられない。

そこで、諸君へ

漢文学習の目的は、ともすると、解釈だけができればよいと思われがちであるが、実は、日本の伝統的な文学表現、すなわち自己表現に

かかわるものである。そこで、これから諸君が目にする漢文教材は、少なくとも数回以上は、大きな声を挙げて読んでほしい。音読することによって、訓読文体が諸君の中へ自然と染み込むからだ。句法など、頭で覚え読み解くという便法ではなく、体のリズムを訓読体のリズムで浸してほしい。

「習うより慣れる」という諺ことわざ通りの音読によって、豊かな「表現」を獲得されんことを期待する。表現の獲得は、ほかでもない、自己表現の手段の獲得であり、それはひいては「自己実現」につながるものである。

参考

【漢和辞典活用のすすめ】

漢文を読んでいると、読み方がわからない字や意味がわからない箇所が出てきて困ることがよくある。そのようなときには、まず漢和辞典を引くことをおすすめする。

漢和辞典には数万字の漢字が収録されている。その中から目当ての漢字を探し出すために、「索引」を活用してほしい。

① 知っている読み方を手がかりにして探す

漢字の読み（音・訓）がわかっている場合は「音訓索引」で調べる。

訓読みを知っていると調べやすい。

② 部首を手がかりにして探す

「くさかんむり」「さんずい」などの漢字の部首がわかっている場合は「部首索引」で調べる。同じ部首のものでは、画数の少ない順に掲載されている。

③ 読みも部首も不明

漢字を総画数の少ないものから順に配列した「総画索引」で調べる。こうして調べたい漢字にたどりついたら、その説明をじっくり読んでみよう。きつと解答の手がかりが見つかるはずである。

今まで漢和辞典をほとんど使ったことがないなら、きつと「こんな便利なものがあつたのか!」と感動するに違いない。漢和辞典は、漢文学習の強い味方なのである。

1章

訓点・書き下し

漢文の構造

漢文は、英語などと同じように「主語―述語―目的語(補語)」と表現するのが一般的である。その点、助詞を用いて「(主語)が(目的語)を(述語)する」と表現する日本語とは語順が異なる。しかし漢文は、英語ほどには目的語と補語との区別が明確でなかったり、時制概念が希薄だったり、主語や目的語・補語などを省略して表現したりする。時制のない点や語の省略という面では、むしろ日本語の発想に近いものがあるといえる。

①主語＋述語

主語の下に述語がくる、「何がどうする・何がどんなだ・何が……である」という文。日本語と同じ語順である。

大器^{オス}、晩成^{オス}。 ↓大器は(主語) 晩成する(述語動詞)。
 草木深^シ。 ↓草木が(主語) 深い(形容詞)。
 桜花爛漫^{クラ}。 ↓桜花が(主語) 爛漫である(形容動詞)。
 孔子魯人^{ハルヒトナリ}。 ↓孔子は(主語) 魯の人である(断定動詞)。

②主語＋述語＋目的語／主語＋述語＋補語

漢文では、目的語(動詞の動作作用の及ぶ対象となる語)・補語(意味が十分でない述語を補う語)は、述語の後に置かれ、「(主語)が(述語)する・(目的語)を」「(主語)が(述語)する・(補語)に・より・

と」という形で表される。

主人送^ル客^ヲ。 ↓主人が(主語) 客を(目的語) 送る(述語)。
 夕陽映^ズ新緑^ニ。 ↓夕陽が(主語) 新緑に(補語) 映える(述語)。

③主語＋述語＋目的語＋補語／主語＋述語＋補語＋目的語

多くは「目的語(ヲ)＋補語(ニ)」の形をとる。「補語(ニ)＋目的語(ヲ)」の場合は、補語の位置に人に関係する名詞(間接目的語)が入る。まれに「補語(ニ)＋補語(ニ)」の形もある。

君子揚^グ名^ヲ後世^ニ。 ↓君子は(主語) 名を(目的語) 後世で(補語) 揚げる(述語)。
 我^ニ与^ニ若^シ茅^ヲ。 ↓私は(主語) あなたに(補語) 茅を(目的語) 与える(述語)。

④修飾語＋被修飾語

修飾語は、原則として被修飾語のすぐ上に置かれる。

漢文訓読とは

漢字だけで書かれている文を**白文**という。「訓読」とは、**白文を日本語の古典文法に従って読んでいくこと**である。そのためには、記号や文字（句読点・送り仮名・返り点）などを白文に施し、訓読漢文にする。白文に施した記号や文字を総称して**訓点**という。漢文訓読において、出てくる用語をまとめて説明しておこう。

① 送り仮名

漢文には、日本語の活用語（用言・助動詞）の活用語尾を表す文字がない。また、助詞を表す文字も数が少ない。そのため、それに該当するものは送り仮名を補って読むことになる。送り仮名は、**古典文法に基づいて歴史的仮名遣い**を用い、**漢字の右下にカタカナ**で小さく施す。

② 返り読み

漢語と日本語とで語順の違うものは、先に下の語を読んでから上に返らねばならない。これを返り読み（返読）という。下にあるながら先に読む語には目的語（送り仮名「…ヲ」・補語（「…ニ／…ト／…ヨリ」）が多いため、「鬼と（ヲ）二ト）会つたら返れ」と覚えておく。

洗足／洗ヲ（述語）＋足ヲ（目的語）／足を洗ふ
就職／就ヲ（述語）＋職ニ（補語）／職に就く

1章 訓点・書き下し

③ 返り点

返り読みのため、下から上に返って読む順序を示す符号を返り点という。**漢字の左下に小さく**施す。

④ 書き下し文

漢文を訓点に従って日本語に置き換えたもの。原則として、**古典文法に従い、歴史的仮名遣い**を用いて、漢字かな混じりで書き表す。

返り点の付け方

① 1点（かりがね点）

すぐ上の一字に返って読むときに用いる。

守ル株ヲ／株を守る。
乗レ馬ニ／馬に乗る。

② 二（三）点

二字以上を隔てて返るときに用いる。

欲ス富貴ヲ／富貴を欲す。
足ニ以テ徴ス甲兵ニ／以て甲兵を徴するに足る。

③上(中)下点

一・二点をつけた句を挟んで、さらに上に返って読むときに用いる。

有能^リ能^ク為^ス狗盗^ヲ者^上。／能^ク狗盗^ヲ為^ス者^ナ有^リ。／
不^ズ為^ニ児孫^ノ買^ハ美田^ヲ上。／児孫^ノ為^ニ美田^ヲ買^ハず。

④甲乙(丙丁…)点

さらに複雑な構文の場合に用いる。

莫^シ不^ズ延^ベ頸^ヲ欲^セ為^ニ太子^ノ死^ス者^上。／頸^ヲ延^ベて太子^ノ為^ニ死^スす^ルを欲^セざる者^ナ莫^シ。

⑤熟語の返り点

熟語へ戻って読む場合、熟語の真ん中に点をつける。その際、熟語を構成する字と字の間にハイフン(―)をつけるのが一般的である。

慰^ム勞^ス之^ヲ。／之^ヲを慰^ム勞^スす。

⑥一点とレ点、上点とレ点の組み合わせ

二点とレ点、中点下点とレ点が組み合わせられることはない。

為^ル人^ノ所^ト制^ス。／人^ノ制^スる所^ト為^ル。／
不^ダ敢^テ以^テ先王^ノ之^ヲ臣^ト為^ス。／敢^テへて先王^ノ之^ヲ臣^トを以^テ臣^トと為^ス。

書き下し文の原則

「書き下せ」「書き下し文にせよ」という問題は入試頻出であるから、確実に正解できるように練習し、ぜひ得点源としたい。その際には以下の各点に留意する。

①漢文を訓点に従って読む。送り仮名は、ひらがなにする。

遂^ニ逃^レ去^ル。／遂^ニ逃^レ去^ル。

②古典文法に従って読む。

餓^エ死^ス於^ニ首陽山^ニ。／餓^エて首陽山^ニに死^ス。

。漢文では、原則としてカ変動詞とナ変動詞は使わない。ナ変「死ぬ」はサ変「死す」を、ナ変「往ぬ」は四段「往く」を用いる。カ変「来」は、四段「来たる」を用いる。
。動詞は漢字を音読みにし、サ変にして使うことが多い。

③日本語の文法で自立語に当たる語の漢字はそのまま漢字で表し、付属語(助動詞・助詞)に当たる語はひらがなで表す。

廉頗^ハ趙^ノ之^ノ良將^{ナリ}也。／廉頗^ハ趙^ノ之^ノ良將^{ナリ}なり。

1章

訓点・書き下し

。自立語でも送り仮名となっているものや、再読文字「将・且（まさ）ニ・ト」の「す（動詞）」は、ひらがなで表す。

④「置き字」は無視する。

晏子怪あやし之シ而問フ之レ。／晏子怪しみて之を問ふ。

返読文字

漢文には、その文字があると返り読みをするというものがある。これを返読文字へんぞくもじという。「鬼と会つたら返れ」の「ヲ・ニ・ト・ヨリ」がつかなくても、返り読みをする文字と覚えておく。

《代表的な返読文字》

- ①動詞 ↓有（あり）、能（あたフ）、欲（ほつス）
- ②形容詞 ↓無・莫・毋・勿（なシ・なカレ）、多（おほシ）、少・鮮・寡（すくなシ）、易（やさシ）、難（かたシ）
- ③助動詞 ↓不・弗（ず）、可（ベシ）、如・若（ごとシ）、見・被・為（る・らル）、使・令・教・遣（しム）
- ④助詞 ↓自・従・由（より）、与（と）、每（ごと）
- ⑤その他 ↓非・匪（あらず）、所（ところ）、雖（いへども）、所以（ゆゑん）

*ただし、これらの文字で必ず返読するとは限らない。文中でその文字がどんな働きをしているかによって変わってくる。

置き字

漢文には、名詞・動詞・形容詞などの実質的な意味をもつ語＝実辞と、実辞や文にくっついてそれらの意味を充実させる役割をもつもの、それ自体は実質的な意味をもたない語＝助辞（＝助字）とがある。助字の中で、訓読の際、その文字の働きが送り仮名によって表されたら、その文字に該当する訓がないために、読まない語がある。文中の「於・乎・于・而」や文末の「焉・矣・兮」などがそれである。これらの字を、日本的に総称して置き字という。

①於・于・乎

補語の上に置かれ、前置詞として場所・時間・比較・受身・対象などを表す置き字である。

漢文の補語は、述語の内容を補う語で、英語の補語ほど明確なものではない。補語には送り仮名「ニ・ト・ヨリ」が付いて述語に返り読みするので、この置き字を含む文は、次のように読まれることを原則として覚えておくといよい。

子入レ太廟ニ、每レ事問フ。／子太廟に入れば、事ごとに問ふ。

（「每」が返読文字。「太廟」は天子の靈墓。）

每レ与レ臣論ス此事ヲ。／毎に臣と此の事を論ず。

（「每」は副詞。この文では「与」が返読文字。）

(a) 述語が動詞の場合、補語につける送り仮名は「ニ」が多く、「ヨリ」がそれに次ぐ。ごくまれに、「ト・ヲ」のこともある。

動詞ニ十(於・于・乎)十補語ニ
 飛ニ於北海ニ
 補語ニ動詞
 北海に飛ぶ。

(b) 述語が形容詞・形容動詞の場合は、比較を表すことが多く、その場合、補語につける送り仮名は「ヨリ(モ)」「モ」である。

形容動詞ニ十(於・于・乎)十補語ヨリ(モ)形容動詞
 賢ニ於弟子ニ
 弟子よりも賢なり。
 形容詞ニ十(於・于・乎)十補語ヨリ(モ)形容詞
 寒ニ於水ニ
 水よりも寒し。

(c) 述語が動詞で、この置き字が名詞Aと名詞Bの間に位置する場合、「名詞A(Ⅱ目的語)ヲ名詞B(Ⅱ補語)ニ」となることが多い。

動詞ニ十目的語ヲ十(於・于・乎)十補語ニ
 天生ニ徳ヲ於予ニ
 目的語ヲ補語ニ動詞
 天 徳を予に生ず。

② 而

文中にあつて、**順接や逆接を表す置き字**。

「而」が文頭にある時には、接続詞として「しかうシテ・しかルニ・

しかレドモ・しかモ」などと読むが、文中にある時には、接続助詞「して・て」に当たるものとして送り仮名にし、この字自体は読まない。ただし、「抑揚・累加形」の場合はこれにあてはまらない。

A十而十B/Aシテ(テ)B
 往ニ而死ス
 往きて死す。(行つて死んだ。)
 信ニ而見レ疑
 信にして疑はる。(信義を尽くしたが疑われた。)

○ 古文の接続助詞「して・て」に順接・逆接双方の意味があるように、「して・て」でつないでも順接とは限らない。口語訳の際は注意が必要。

○ 逆接の場合、「ドモ」を用いて、例文「信而見疑」を「信なれども疑はる」としてもよいが、訓読漢文の伝統的な読みは「信にして疑はる」である。なお、逆接の例は比較数が少ない。

③ 焉・矣・也・兮

主として文末に置かれ、語調を整える働きをする置き字。

例題

- 一、() 内の数字の順序で読むように白文に返り点を付けよ。
- (1) 不可不慎也。(4 3 2 1 5。)
- (2) 土佐無物不有。(1 2 6 3 5 4。)
- 二、次の文を書き下せ。
- (1) 君子^{くんし}帰^{かへ}罪^{つみ}於^{おの}己^の。
(2) 不知^し所^こ以^も裁^さ之^{これ}。

解答

- 一 (1) 不可^レ不^レ慎^也。(2) 土佐無物不^レ有。
- 二 (1) 君子(は) 罪を己に帰す。(2) 之を裁する所以を知らず。

古典文法と漢文訓読法

書き下し文には古典文法を用いるが、次の諸点で漢文訓読特有の言い回しをする。

① 逆接の接続助詞として、「已然形+ども(ど)」の他に、「**連体形+も**」を用いることがある。

② 返読文字「每(ごとこ)」を、副助詞として扱う。したがって、書

1章 訓点・書き下し

き下しではひらがなで書き表す。

③ 形容詞「なし(無・莫・母)」、打消の助動詞「ず(不・弗)」、可能・許容の助動詞「べし(可)」、比況の助動詞「ごとし(如・若)」、複合語「あらず(非)」で**仮定**を表す場合、古典文法では、「無くは・ずは・ざらば・べくは・ごとくは・非ずは・非ざらば」を用いるが、漢文では「**無くんば・ずんば・べくんば・ごとくんば・非ずんば**」とする。
。漢文の「べし」は、許容・可能の二つの意味を持つ。

④ **反語**の句法では、「べし^しべからん」「ごとし^しごからん」とせず
に、「**べけん・ごとけん**」とする。「無し」は「無からん・無けん」の
双方を用いる。

⑤ ワ行上一段活用動詞「用ゐる」を、ハ行上二段活用動詞「用ふ」で
読む場合がある。
* 誤用が慣用化し、明治になって許容されたもの。

⑥ 文末にあつて疑問・反語の意を表す終助詞「か・や」は、古典文法
では「**活用語の連体形+か**」「**活用語の終止形+や**(推量の「む」に
は已然形「め」にも付く)」と用法が分かれる。漢文訓読でも一応そ
の原則に従つておくが、それほど厳密には区別されていない。

ZLCAA1-Z1A1-01

3月

添削問題

古…助動詞1

一

一、次の各文について、あとの問に答えよ。

- (1) 月の都の人まうで来ば、捕へ A む。
(2) 思し出づる所ありて、案内せ B て入り給ひぬ。
(3) 御格子あげ C て、御簾を高くあげたれば、笑は D 給ふ。

問一 A D には、助動詞「す」「さす」のどちらかが入る。それぞれ適切なものを適切に活用させて記せ。

(8点)

問二 A D に入る助動詞「す」「さす」で、一つだけ文法的意味が異なるものがあるが、それはどれか。A D の記号を記せ。

(3点)

二、次の各文について、あとの問に答えよ。

- (1) 「さば、早う都へ帰らせたまひぬ」
(2) 今参りつる道に、紅葉のいとおもしろき所あり。
(3) ひさかたの天の河原の渡し守君渡り A ば舵隠してよ
(4) かの鬼も夜ごとに家を巡り、怒れ B 声夜ましにすさまじ。
(5) ある時は来 C 方行く末も知らず、海にまぎれむとしき。

問一 (1)(2)の各文からそれぞれ一つずつ、助動詞「き」「つ」「ぬ」「たり」「り」をそのまま抜き出して(例)にならって記し、また、それ

ZLCAA1-Z1A1-02

問二

(3) (5) の には、助動詞「き」「ぬ」「り」のどれかが入る。それぞれ適切なものを適切に活用させて記せ。

(6点)

例) 去_こ年_ぞ見_みし花_{はな} ↓ し・連体形
ぞれここでの活用形を記せ。

(8点)

ZLCAAT-Z1A2-01

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(25点)

1 《この寺に*別当べつたうありき。家に仏師を呼びて地蔵ぢざうを造らす程に、別当が妻、異男ことをとこに語らはれて、(1)跡をくらうして失せぬ。別当心を惑はして、仏の事をも仏師をも知らず、里村に手を分かちて尋ね求むる間、七八日を経ぬ。仏師ども*檀那だんなを失ひて、空を仰ぎて、手をいたづらにしてゐたり。その寺の*専当せんたう法師これを見て、善心を起こして、食物を求めて、仏師に食はせて、わづかに地蔵の*木作りばかりをし奉りて、彩色・*瓔珞やうらくをば(2)えせず。》

5 その後、この専当法師、病つきて命終はりぬ。妻子悲しみ泣きて、棺に入れながら、捨てずして置いて、なほこれを見るに、死にて六日といふ日の(a)末の時ばかりに、にはかにこの棺はたらく。見る人おぢ恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲しみて、開けて見れば、(x)法師よみがへりて、水を口に入れ、やうやう程経て、冥途めいどの物語す。「大きな鬼二人来たりて、我を捕へて、追ひ立てて、広き野を行くに、白き衣着たる僧出でて来て、『鬼ども、この法師とく許せ。我は地蔵菩薩ぼさつなり。因幡いなばの国隆寺にて、(3)我を造りし僧なり。仏師等食物なくて、日比ひび経しに、この法師信心をいたして、食物を求めて、仏師等を供養して、我が像を造らしめたり。この恩忘れ難し。必ず許すべき者なり』とのたまふ程に、鬼ども許しをはりぬ。ねんごろに道教へて帰しつと見て、生き返りたるなり」といふ。その後、この地蔵菩薩を、妻子ども彩色し、供養し奉りて、長く帰依きえし奉りける。今、この寺におはします。

㊦ *別当Ⅱ大寺・大社の長官。 *檀那Ⅱ施主。 *専当法師Ⅱ寺の雑務を担当する身分の低い僧。 *木作りⅡ木でできた仏像の本体部分。 *瓔珞Ⅱ仏像の頭・首・胸などに掛ける金銀珠玉でできた装飾品。

問一 傍線(a)は現在の何時ごろに当たるか、最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(2点)

- (ア)午前四時 (イ)午前七時 (ウ)午前十時 (エ)午前十一時 (オ)午後二時 (カ)午後五時

問二 《 》で囲んだ部分から、助動詞①「る」「らる」、②「す」「さす」「しむ」、③「たり」「り」が用いられている部分を探し、それぞれ文節の形で抜き出して記せ（①は一箇所、②は二箇所、③は一箇所ある）。

(8点)

問三 傍線(1)～(3)を口語訳せよ。

(10点)

問四 傍線(X)のようになったのはなぜか、現代語で説明せよ。

(5点)



次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(25点)

1 《この寺に*別当べつたうありき。家に仏師を呼びて地蔵ぢざうを造らす程に、別当が妻、異男ことをとこに語らはれて、(1)跡をくらうして失せぬ。別当心を惑はして、仏の事をも仏師をも知らず、里村に手を分ちて尋ね求むる間、七八日を経ぬ。仏師ども*檀那だんなを失ひて、空を仰ぎて、手をいたづらにしてゐたり。その寺の*専当せんたう法師これを見て、善心を起こして、食物を求めて、仏師に食はせて、わづかに地蔵の*木作りばかりをし奉りて、彩色・*璽やうやくをば(2)えせず。》

5 その後、この専当法師、病つきて命終はりぬ。妻子悲しみ泣きて、棺に入れながら、捨てずして置きて、なほこれを見るに、死にて六日といふ日の(a)未の時ばかりに、にはかにこの棺はたらく。見る人おぢ恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲しみて、開けて見れば、(x)法師よみがへりて、水を口に入れ、やうやう程経て、冥途めいどの物語す。「大きな鬼二人来たりて、我を捕へて、追い立てて、広き野を行くに、白き衣着きぬたる僧出でて来て、『鬼ども、この法師とく許せ。我は地蔵菩薩ぼさつなり。因幡いなばの国隆寺にて、(3)我を造りし僧なり。仏師等食物なくて、日比ひひら経しに、この法師信心をいたして、食物を求めて、仏師等を供養して、我が像を造らしめたり。この恩忘れ難し。必ず許すべき者なり』とのたまふ程に、鬼ども許しをはりぬ。ねんごろに道教へて帰しつと見て、生き返りたるなり」といふ。その後、この地蔵菩薩を、妻子ども彩色し、供養し奉りて、長く帰依きえし奉りける。今、この寺におはします。

④ *別当べつたう 大寺・大社の長官。 *檀那だんな 施主。 *専当せんたう法師 寺の雑務を担当する身分の低い僧。 *木作り 木でできた仏像の本体部分。

*璽やうやく 仏像の頭・首・胸などに掛ける金銀珠玉でできた装飾品。

問一 傍線(a)は現在の何時ごろに当たるか、最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(2点)

- (ア)午前四時 (イ)午前七時 (ウ)午前十時 (エ)午前十一時 (オ)午後二時 (カ)午後五時

ZLCAA1-Z1A3-01



一、次の(a)(b)を書き下し文に直して記せ。

(a) 宋人^ニ有^リ下^リ閔^レヘテ^ニ 其^ノ 苗^ノ 之^ル 不^レ 長^ゼ 而^ム 擣^クレ^テ 之^ヲ 者^上。

(b) 張承欲^ス 下^シ 合^シテ^ニ 徒^ラ 衆^ト 一^ヲ 与^ト 二^ニ 天^下 一^ヲ 共^ニ 誅^ス 卓^上。

二、次の(a)～(c)の書き下し文に従って、提示された漢文に訓点を付けよ。

(a) 人^ハ 李^リ 林^ハ 甫^ハ を以^テ、口^ニ 蜜^有リ 腹^ニ 劍^有リ と為^ス。

人 以 李 林 甫、為 口 有 蜜 腹 有 劍。

(b) 此^レ 吾^ガ 子^を を居^ル 処^を せしむる所^ニ に非^ズ ざるなり。

此 非 所 居 処 吾 子 也。

(c) 是^を を以^テ 君^子 は必^ズ 其^ノ 与^ル 所^ニ の者^を を慎^ム。

是 以 君 子 必 慎 其 所 与 処 者。

(15点)

(10点)

四

次の文章は齊の威王の新しい夫人選びに際し、宰相の薛公がいかにか賢くふるまったかを述べた文章である。これを読み、あとの間に答えよ。ただし、設問の都合により一部訓点を省略したところがある。(25点)

薛公相^{シヤウタリ} 齊^{セイニ} 威王^{カハ} 夫人^{フじん} 死^シ。中^{ウチニ} 有^{アリ} 二十^{ニジュウ} 孺子^{ニョウシ}、皆^{ハハ} (1) 貴^キ 於^オ 王^ニ。薛公^{セツコウ} 欲^ス 知^ツ 王^ノ 所^ヲ 欲^ス 立^テ、而^{シテ} 請^フ

置^キ 一^{ヒト} 人^ヲ 以^テ 為^ス 乙^ニ。夫人^{フじん} 王^ノ 聽^カ 之^ヲ、則^ス 是^レ 説^ク 行^フ 於^テ 王^ニ、而^{シテ} 重^シ 於^テ 置^ル 夫人^ニ 也^ニ。(2) 王^ノ 不^レ 聽^カ 是^レ 説^ク 不^レ 行^フ、而^{シテ} 輕^シ 於^テ

置^ル 夫人^ニ 也^ニ。欲^ス 先^ニ 知^リ 王^ノ 之^ノ 所^ヲ 欲^ス 置^ル、以^テ 勸^メ 王^ニ 置^ル 之^ヲ。於^テ 是^ニ 為^ス 十^ニ 玉^ヲ 珥^リ、而^{シテ} 美^シ 其^ノ 一^ヲ、而^{シテ} 獻^ス 之^ヲ。王^ノ 以^テ

賦^ニ X^ニ (3) 明^ニ 日^ヲ 坐^シ 視^シ 美^シ 珥^ノ 之^ノ 所^ヲ 在^ル、而^{シテ} 勸^メ 王^ニ 以^テ 為^ス 夫人^ト。

注 * 薛公 || 齊国の宰相。 * 相 || 宰相。 * 威王 || 齊国の王。 * 中 || 後宮の中。 * 孺子 || ここでは、後宮にいる王の夫人候補の女性。 * 所欲立 || 夫人にしようと思つてゐる人。 * 請 || 進言する。 * 則 || そのときには。 * 是説 || 自分の考え。

* 玉珥 || 耳飾り。 * 賦 || 分け与える。

問一 傍線(1)のここでの意味を簡潔に記せ。(4点)

問二 傍線(2)は、「王聴かずんば是の説行はれずして、置かるる夫人に軽んぜられん」と読む。この読みに従つて、次の漢文に返り点と送り仮名を付けよ。(6点)

王不聽是說不行、而輕於置夫人也

問三

X に最適な言葉を、文中から三字（訓点は字数に含めない）で抜き出して記せ。

（5点）

問四

傍線(3)を書き下し文にせよ。

（4点）

問五

次の(ア)～(エ)の中から、問題文の内容に合致するものを一つ選び、記号を記せ。

（6点）

- (ア) 薛公は耳飾りを作ったことで、十人の夫人候補の女性たちから重んじられた。
- (イ) 薛公は王が最も美しい耳飾りを与えた女性を夫人にするように王に進言した。
- (ウ) 薛公は以前から自分を重んじてくれていた女性を夫人とするように王に進言した。
- (エ) 薛公は王が夫人にしそうな女性に、最も美しく作った耳飾りを与えた。



一、次の各文について、あとの問に答えよ。

- (1) 月の都の人まうで来ば、捕へ A む。
- (2) 思し出づる所ありて、案内せ B て入り給ひぬ。
- (3) 御格子あげ C て、御簾を高くあげたれば、笑は D 給ふ。

問一 A D には、助動詞「す」「さす」のどちらかが入る。それぞれ適切なものを適切に活用させて記せ。(8点)

問二 A D に入る助動詞「す」「さす」で、一つだけ文法的意味が異なるものがあるが、それはどれか。A D の記号を記せ。(3点)

二、次の各文について、あとの問に答えよ。

- (1) 「さば、早う都へ帰らせたまひぬ」
- (2) 今参りつる道に、紅葉のいとおもしろき所あり。
- (3) ひさかたの天の河原の渡し守君渡り A ば舵隠してよ
- (4) かの鬼も夜ごとに家を巡り、怒れ B 声夜ましにすさまじ。
- (5) ある時は来 C 方行く末も知らず、海にまぎれむとしき。

問一 (1)(2)の各文からそれぞれ一つずつ、助動詞「き」「つ」「ぬ」「たり」「り」をそのまま抜き出して(例)にならって記し、また、それ

ぞれここでの活用形を記せ。

(例) 去年見し花↓し・連体形

(8点)

問二 (3)〜(5)の **A** 及び **C** には、助動詞「き」「ぬ」「り」のどれかが入る。それぞれ適切なものを適切に活用させて記せ。(6点)

解説

問一 各空欄の上にある動詞の活用の種類に注目する。

す ↓ 「四段・ラ変・ナ変動詞の未然形」に接続する

さす ↓ 「それ以外の動詞の未然形」に接続する

A上には動詞「捕ふ」がある。これに助動詞「ず」を付けると「とらへず」と「ず」の直前は八行の工段音になるので、「捕ふ」は八行下二段活用の動詞。よって「さす」が付く。直後には未然形に接続する助動詞「む」があるので、Aは未然形「させ」となる。B上には、〈取り次ぎを頼むこと〉の意の体言「案内」と「す」が一語となったサ変の複合動詞「案内す」があるので、「さす」が付く。下には連用形に付く接続助詞「て」があるので、Bは連用形「させ」になる。

C上にあるのは終止形「上ぐ」となる動詞。「あげず」となるから、これはガ行下二段活用。よって「さす」が付く。下には接続助詞「て」があるので、連用形「させ」となる。

D「笑ふ」は「わらはず」となるから、八行四段活用の動詞。よって「す」が付く。Dは下の用言「給ふ」に係るので、連用形

の「せ」となる。

問二 「す・さす」には〈尊敬〉と〈使役〉の用法がある。〈尊敬〉と

なるのは、

- ①直後に「給ふ」等の尊敬語がある
- ②文の主語と「す・さす」の付く動詞の動作主(その動作をする人)とが同じ人物である

という二つの条件を満たしている場合である。①②のどちらかでも満たしていない場合は〈使役〉となる。

ABCでは、各々の直後には尊敬語がないので、これらはすべて〈使役〉の用法。Dは、直後に「給ふ」があつて、「笑ふ」のはこの文の主語の人物自身と判断できるので、Dだけが〈尊敬〉の用法である。

二

問一 (1)「たまひね」の「たまひ」は、八行四段活用動詞「たまふ」の連用形。「ね」は、連用形に付き、文末にあつて「ね」という

形なので、助動詞「ぬ」の命令形である。「帰らせ」の「せ」は、未然形の「帰ら」に付いているので、〈尊敬〉の助動詞「す」の連用形「せ」である。〈過去〉の助動詞「き」の未然形「せ」は、連用形に接続する。

(2) 「参りつる」の「つる」はラ行四段活用動詞「参る」の連用形「参り」に付いており、「道」に係るので、〈完了〉の助動詞「つ」の連体形。「おもしろき」は、一語の形容詞「おもしろし」の連体形であるから、この「き」は助動詞ではない。

問一 A直前がラ行四段活用の動詞「渡る」の連用形「渡り」である

から、連用形に接続する助動詞の「き」「ぬ」のどちらかが入る。次に、これは短歌でその第四句（＝定型は七音）なので、「キミワタリ A B」のAには一音のものしか入らない。この点を踏まえること。直後には接続助詞「ば」があり、「ば」は未然形と已然形に付くが、「き」の已然形は「しか」、「ぬ」の已然形は「ぬれ」とともに一音ではない。「き」の未然形は「せ」で一音であるが、「き」の未然形「せ」は「せば……まし」と助動詞「まし」を伴う場合以外には用いないので、Aには「ぬ」の未然形「な」が入る。

B直前にあるのがラ行四段活用の動詞「怒る」の已然形（命令形）「怒れ」なので、「サ変の未然形・四段の已然形（命令形）」に付く助動詞「り」が入る（ここでの意味は〈存続〉）。直後には体言「声」があるので、「り」は連体形の「る」となる。

C直後の「行く末」とともに、この「来 C 方行く末」は〈やつて来たところとこれから向かうところ〉の意となるから、Cには

過去の助動詞「き」の連体形「し」が入る。なお、通常は連用形に付く「き」だが、カ変やサ変の場合は未然形に付く特別な接続があるので注意が必要となる。また、「来し方行く末」は、多くは〈過去と未来〉の意味で用いられる重要な慣用語である。

全訳

一 (1) 月の都の天人がもし来しましたらば、捕まえさせよう。
(2) 思い出しなざる所があつて、取り次ぎを頼ませてお入りになった。

(3) 御格子を上げさせて、御簾を高くあげたところ、(中宮様は) お笑いになる。

二 (1) 「それならば、早く都にお帰りなさいませ」

(2) 今参上した道中に、紅葉がとても美しい所があつた。

(3) 天の川の渡し守よ、もしあなたが渡るならば、〈戻れないように〉かじを隠してしまつておくれ。

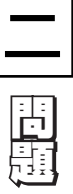
(4) その鬼も夜ごとに家々を回り、怒っている声は日がたつにつれて夜ごとぞつとするほどである。

(5) ある時は来た所も行く所もわからず、海にのみこまれそうになつた。

ZLCAAI-Z1C1-04

解答

問二	二問一	問二	一問一
A な	(1) ね・命令形	D	A させ
B る	(2) つる・連体形		B させ
C し			C させ
			D せ



次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(25点)

1 《この寺に*別当べつたうありき。家に仏師を呼びて地蔵ぢざうを造らす程に、別当が妻、異男ことをとこに語らはれて、(1)跡をくらうして失せぬ。別当心を惑はして、仏の事をも仏師をも知らず、里村に手を分かちて尋ね求むる間、七八日を経ぬ。仏師ども*檀那だんなを失ひて、空を仰ぎて、手をいたづらにしてゐたり。その寺の*専当せんたう法師これを見て、善心を起こして、食物を求めて、仏師に食はせて、わづかに地蔵の*木作りばかりをし奉りて、彩色・*瓔珞やうらくをば(2)えせず。》

5 その後、この専当法師、病つきて命終はりぬ。妻子悲しみ泣きて、棺に入れながら、捨てずして置いて、なほこれを見るに、死にて六日といふ日の(a)末の時ばかりに、にはかにこの棺はたらく。見る人おぢ恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲しみて、開けて見れば、(x)法師よみがへりて、水を口に入れ、やうやう程経て、冥途めいどの物語す。「大きな鬼二人来たりて、我を捕へて、追い立てて、広き野を行くに、白き衣着たる僧出でて来て、『鬼ども、この法師とく許せ。我は地蔵菩薩ぼさつなり。因幡いなばの国隆寺にて、(3)我を造りし僧なり。仏師等食物なくて、日比ひび経しに、この法師信心をいたして、食物を求めて、仏師等を供養して、我が像を造らしめたり。この恩忘れ難し。必ず許すべき者なり』とのたまふ程に、鬼ども許しをはりぬ。ねんごろに道教へて帰しつと見て、生き返りたるなり」といふ。その後、この地蔵菩薩を、妻子ども彩色し、供養し奉りて、長く帰依きえし奉りける。今、この寺におはします。

② *別当べつたう||大寺・大社の長官。 *檀那だんな||施主。 *専当せんたう法師||寺の雑務を担当する身分の低い僧。 *木作り||木でできた仏像の本体部分。 *瓔珞やうらく||仏像の頭・首・胸などに掛ける金銀珠玉でできた装飾品。

問一 傍線(a)は現在の何時ごろに当たるか、最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(2点)

- (ア)午前四時 (イ)午前七時 (ウ)午前十時 (エ)午前十一時 (オ)午後二時 (カ)午後五時

問二 《 》で囲んだ部分から、助動詞①「る」「らる」、②「す」「さす」「しむ」、③「たり」「り」が用いられている部分を探し、それぞれ文節の形で抜き出して記せ(①は一箇所、②は二箇所、③は一箇所ある)。(8点)

問三 傍線(1)～(3)を口語訳せよ。(10点)

問四 傍線(X)のようになったのはなぜか、現代語で説明せよ。(5点)

出典

『宇治拾遺物語』巻第三の十三「因幡国別当 地藏作りさす事」

『宇治拾遺物語』は、鎌倉時代の初期に成立した説話集。作者は不明。平安時代末期に成立した『今昔物語集』に収めていない説話を「拾い集めた」というのが題名の由来であるが、実際は『今昔物語集』と重複する話も多い。問題文でとりあげたこの話も、『今昔物語集』巻第十七の二十五と重なっている。

解説

問一 十二支による時刻表示の問題。実際には夏季や冬季でずれが生じるのだが、入試においては、以下のよう

に覚える。

- ・子(ね) [午前〇時] ・丑(うし) [午前二時]
- ・寅(とら) [午前四時] ・卯(う) [午前六時]
- ・辰(たつ) [午前八時] ・巳(み) [午前十時]
- ・午(うま) [午前十二時] ・未(ひつじ) [午後二時]

- ・申(さる) [午後四時] ・酉(とり) [午後六時]
- ・戌(いぬ) [午後八時] ・亥(ゐ) [午後十時]

なお、方位も十二支によって示し、北が子、東が卯、南が午、西が酉、北東は丑寅(うしとら うしとら)、南東は辰巳(たつみ たつみ)、南西は未申(ひつじとら ひつじとら)、北西は戌亥(いぬい いぬい)となる。

問二 「文節」で抜き出すという条件に注意。次の二点に留意すること。

- ・各文節の先頭には必ず自立語(助動詞・助詞以外の品詞)がある。
- ・一つの文節には、自立語は一つだけ含まれる。

①「異男に語らはれて」の「れ」が、ハ行四段活用の動詞「語らふ」の未然形に付いているので、助動詞の「る」。直後に接続助詞「て」があるので、「れ」の活用形は連用形。ここは「受身」の用法である。

②「地藏を造らす程に」の「する」が、ラ行四段活用の動詞「造

る」の未然形に付いているので、助動詞「す」の連体形。直後に尊敬語がないので、〈使役〉の用法である。また、「仏師に食はせて」の「せ」が、ハ行四段活用助動詞「食ふ」の未然形に付いているので、〈使役〉の助動詞の「す」。接続助詞「て」が下接しているの、連用形である。

③「手をいたづらにしてゐたり」の「たり」が、ワ行上一段活用の助動詞「居る」の連用形「ゐ」に付いているので、助動詞「たり」の終止形である。

問三 (1)直前に〈他の男から誘いを受けた〉、直後に〈夫の別当がどうしてよいかわからなくなった〉という内容があるから、「跡をくらうして」は〈他の男について行つて〉行方をくらませて

の意味、「失せぬ」は〈姿を消した〉の意味と判断できる。「失せぬ」の「ぬ」は、〈完了〉の助動詞「ぬ」の終止形である。

(2)「え」は副詞で、下に打消語(ここでは助動詞の「ず」)を伴つて、〈(とても)……できない〉と不可能を表すもの。「せ」はサ変動詞「す」の未然形である。

(3)「造りし」の「し」は〈過去〉の助動詞「き」の連体形。「なり」は体言の「僧」に下接しているの、〈断定〉の助動詞である。

問四 専当法師が生き返ることができた理由は、死後の世界で、地蔵菩薩が鬼たちに語っている部分に示される。そこで地蔵菩薩は、

別当の代わりに自分の像を仏師に造らせた専当法師の「恩忘れ難し」と述べている。その恩返しとして、専当法師を生き返らせた

のである。

全訳

この寺に別当がいた。家に仏師を呼んで地蔵を造らせているうちに、別当の妻が、別の男に誘いこまれて、行方をくらませていなくなつてしまった。別当は、あわてふためいて、仏のことも仏師のことも気になけなくなつて、村里に手分けをして(妻を)探し求めるうちに、七、八日が過ぎた。仏師たちは施主(である別当)を失つて、空を仰いで、手をこまねいていた。その寺の専当法師がこれを見て、善心を起こして、食物を探して、仏師たちに食べさせて、ただ地蔵像の木作りの本体部分だけをお造り申し上げて、彩色や飾りはすることができない。

その後、この専当法師は、病気になるつて死んでしまった。妻子は悲しみ泣いて、棺に入れたものの、捨てないで(そのまま)置いて、そのままこれを見ていると、死んで六日目という日の未の時(午後二時)ごろに、急にこの棺が動く。(それを)見る人は怖がり恐れて逃げ去つた。妻は泣き悲しんで、(棺を)開けて見ると、法師は生き返つて、水を口に入れ、やつとのことではばらくして、冥途の話をする。「大きな鬼が二人来て、自分を捕まえて、追いたてて、広い野を行くと、白い衣を着た僧が出てきて、『鬼たち、この法師をすぐ許しなさい。私は地蔵菩薩である。(この法師は)因幡の国隆寺で、私を造つた僧である。仏師たちが食物がなくて、数日来たつた時に、この法師が信心を起こして、食物を探して、仏師たちに施しをして、私の像を造らせた。この恩を忘れることはできない。必ず許さなければならぬ者である』とおっしゃるので、鬼たちは許してくれた。丁寧に(この世

ZLCAA1-Z1C2-04

への)道を教えて帰したと思つてゐるうちに、生き返つたのである」と言う。その後、この地藏菩薩を、妻子たちは彩色し、供養し申し上げて、長く信仰し申し上げた。(この地藏像は)今、この寺にいらつしやる。

解答

問一 (㊦)

問二 ①語らはれて ②造らする・食はせて ③みたり

問三 (1)行方をくらまして姿を消してしまつた

(2)することができない

(3)私を造つた僧である

問四 地藏菩薩が、自分の像を造つた専当法師の恩に報いるため

に冥途の鬼から救い出してくれたから。

3月

添削問題解答解説

漢文訓点・書き下し

ZLCAA1-Z1C3-01

三

問題

一、次の(a)(b)を書き下し文に直して記せ。

(a) 宋人^ニ有^リ下^レ閔^{ヘテ}。其^ノ苗^ハ之^レ不^レ長^シ。而^{シテ}擬^ク之^ヲ者^上。

(b) 張承欲^ス下^{シテ}合^シ徒衆^ヲ。与^ト天下^ニ共^ニ誅^ス卓^ヲ。

二、次の(a)～(c)の書き下し文に従って、提示された漢文に訓点を付けよ。

(a) 人は李林甫を以て、口に蜜有り腹に劍有りと為す。

人以李林甫、為口有蜜腹有劍。

(b) 此れ吾が子を居処せしむる所に非ざるなり。

此非所居処吾子也。

(c) 是を以て君子は必ず其の与に処る所の者を慎む。

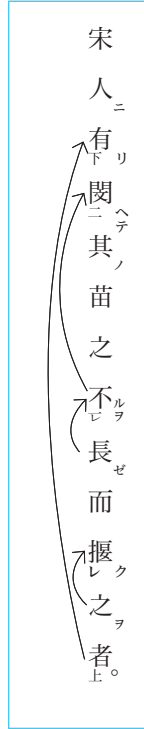
是以君子必慎其所与処者。

(10点)

(15点)

解説

一 (a) 返り点に注意して、返り方を矢印で示すと次のようになる。



まず上から順に「宋人に」と読む。下点、二点の付いている字はとぼして「其の苗之」と読むが、この「之」は助詞の「の」にあたるからひらがなに直す。「不」には下点が付いている。まずレ点に従って「長ぜざるを」と読んでから、一二点に従って「不るを」読んで「不」と読む。そして、この「不」は打消の助動詞にあたるからひらがなに直さなければならぬ。送り仮名に「ル」とあることから、打消の助動詞「ず」が活用して「ざる」となっていることがわかる。「ず」とする誤りが多いが、「ず」の活用に「ずる」などという形はない。

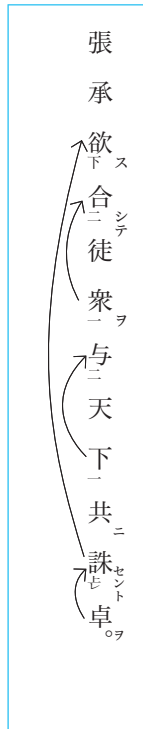
「不」を書き下す場合の注意

- ① 「不」に送り仮名が付いていない
↓ 「ず」と書き下す
- ② 「不」に「ラ・リ・ル・レ」という送り仮名が付いている
↓ 「ぬ」と読んで「ぬら・るい・るれ」と書き下す

次の「而」には送り仮名もなく、置き字である。置き字は書き

下し文には書かない。続いて、レ点に従って「之を擷く」と読む。こちらの「之」は「これ」と読む代名詞なので、漢字のままでもよい。文末の「者」から上下点に従って「有」へ返り、「者有り」と読む。句点も忘れないように。

(b) 同じように矢印で示してみよう。



「張承」は人名。下点、二点をとぼして「徒衆を」と読み、二点に戻って「合して」。次の一二点も同様に「天下与」と読むが、この「与」は助詞の「と」にあたるのでひらがなに直し、「天下と共に」と下に続ける。「誅」にはキが付いているが、これは(a)のレ点と同じように、まずレ点から読めばよい。「卓を誅せんと」と読んで、上下点に従って「欲す」へ返る。

二

返り点を付ける場合は、書き下し文をもとに、まず漢字を読む順に番号を付けるとよい。その上で、次のきまりに従って点を付ける。

返り点を付けるときのルール

- ・ すぐ上の一字に返るとき↓レ点
- ・ 二字以上を隔てて上の字に返るとき↓二(三…)点

・一二点を挟んで上の字に返るときは上(中)下点

この問では「訓点を付けよ」とあることに注意。訓点とは、返り点・送り仮名・句読点を指す。



「李林甫を以て」は「以↑甫」と間に二字はさんで返るから一二点を使い、「以」の左下に二点、「甫」の左下に一点を付け、それぞれの右下に「テ」「ヲ」という送り仮名を付ける。

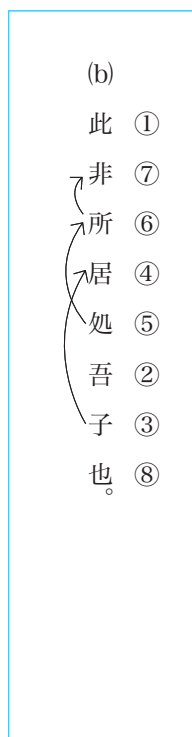
続いて、「口に蜜有り」「腹に劍有り」という、構造の同じ(対句のような)部分がくる。この二つの部分は並列の関係だが、出てくる順番に上から読んでいく。そうすると「口に蜜有り」は「口有↑蜜」で、「有」と「蜜」の間は一字だけ返るからレ点を付ける。同様に「腹に劍有り」も「腹有↑劍」で、「有」と「劍」の間にレ点を付ける。送り仮名は、「口」「腹」の右下にそれぞれ「ニ」を付け、上の「有」には「リ」を、下の「有」には「リト」を、それぞれ右下に付ける。

さて、書き下し文の「腹に劍有り」と「為す」に返るにはどのような返り点を使ったらよいか。ここまでの返り点は「人以李林甫、為口有蜜腹有劍」となっている。「腹に劍有り」と「為す」の「有」から「為」に返るにはレ点が付いた字を含む四字を飛び

越すことになり、ここは一二点を使う。となると、「為」には二点が付くはずだが、では一点はどこに付ければよいか。ここでよく起こるミスは、

× 為……腹有レ劍

これでは、「劍」から「有」に返るのが優先なのか、「劍」から「為」に返るのが優先なのかわからなくなる。そこで、レと一とを組み合わせたレ点を「有」と「劍」の間に付け、「劍」から「有」に一字返り、その地点を「一」として「二」に返るようにするのである。



「居処」という二字の熟語がある。二字の熟語を下から返って読む場合は、「居・処」のように中間にハイフンを付けてまとめ読みすることを示し、返り点はハイフンの左に付けるのがきまり。「吾が子を居処せしむる」は、「子」から「居」へと三字返ることになるから一二点を用い、「子」の左下に一点、「居・処」のハイフンの左の位置に二点を付ける。

「居処せしむる所」は「処」から「所」へと二字返るから、「所」の左下に二点を付ける。

「所に非ざる」は「所」から「非」へと一字返るだけだから、「非」の左下にレ点を付ける。「なり」は助動詞で、文末の「也」がこ

れに該当する。したがって「非」の送り仮名は「ザル」だけでよい。

(c) ① ② ③ ④ ⑤ ⑪ ⑥ ⑨ ⑦ ⑧ ⑩

是 以 君 子 必 慎 其 所 与 処 者。

「是を以て君子は必ず」までは原文と書き下し文の字の並び方が同じだから、返り点を付ける必要がない。

「其の与に処る所の者」では、「処」から「所」へと二字返るから一二点を用い、「処」の左下に一点を、「所」の左下に二点を付ける。

次に、「者を慎む」は、「者」から「慎」へと五字返り、その間に一二点を付けた部分を挟んでいるから、上下点を用いて、「者」の左下に上点を、「慎」の左下に下点を付ける。

全訳

一 (a) 宋の国の人で苗が生長しないのを心配して（苗を）抜いてみた者がいた。

(b) 張承は仲間をまとめ天下の人々とともに董卓を討伐しようとした。

二 (a) 人々は李林甫（唐の玄宗皇帝の宰相）を、口から出る言葉は蜜のように甘いお腹の中には剣のように人を傷つける心を持っていると思っていた。

(b) ここはわたしの子を居住させるところではない。

(c) そんなわけで君子は必ず自分とともにいる者を慎重に選ぶ。

解答

一 (a) 宋人に其の苗の長ぜざるを閲へて之を掘く者有り。

(b) 張承徒衆を合して天下と共に卓を誅せんと欲す。

二 (a) 人以_ニ李林甫_ヲ為_ス口有_レ蜜腹有_レ劍。

(b) 此非_レ所_三居_一也。吾子_ニ也。

(c) 是以_テ君子_ハ必_ズ慎_ム其_ノ所_ニ与_ル者_ト也。

四 問題

次の文章は斉の威王の新しい夫人選びに際し、宰相の薛公がいかに賢くふるまったかを述べた文章である。これを読み、あとの問に答えよ。ただし、設問の都合により一部訓点を省略したところがある。

(25点)

薛公^一相^レ。 齊^二威王^一夫人死^ス。 中^二有^一二十^三孺子^一、皆^レ貴^ニ於王^ニ。 薛公欲^テ知^ニ王^一所^レ欲^レ立^テ而^テ請^ニ置^一二人^一以^テ為^ニ夫人^一。 王聽^レ之^一。 則^レ是^レ説行^ニ於王^ニ而重^ニ於置^一夫人^一也。 (2) 王不聽是説不行、而輕於置夫人也。 欲^レ先^ニ知^一王之^レ所^レ欲^レ置^一、以^テ勸^レ王置^ニ之^一。 於^レ是^レ為^ニ十^一玉珥^一而美^ニ其^一一^一而獻^レ之^一。 王以^テ賦^ニ X (3) 明日坐^ニ視^一美珥^一之所^レ在^一、而勸^レ王以^テ為^ニ夫人^一。

- ④ *薛公|| 齊国の宰相。 *相|| 宰相。 *威王|| 齊国の王。 *中|| 後宮の中。 *孺子|| ここでは、後宮にいる王の夫人候補の女性。 *所欲立|| 夫人にしようと思っっている人。 *請|| 進言する。 *則|| そのときには。 *是説|| 自分の考え。 *玉珥|| 耳飾り。 *賦|| 分け与える。

問一 傍線(1)のここでの意味を簡潔に記せ。(4点)

問二 傍線(2)は、「王聴かずんば是の説行はれずして、置かるる夫人に軽んぜられん」と読む。この読みに従って、次の漢文に返り点と送り仮名を付けよ。(6点)

王不聽是說不行、而輕於置夫人也

問三 **X** に最適な言葉を、文中から三字（訓点は字数に含めない）で抜き出して記せ。

(5点)

問四 傍線(3)を書き下し文にせよ。

(4点)

問五 次の(ア)～(エ)の中から、問題文の内容に合致するものを一つ選び、記号を記せ。

(6点)

- (ア) 薛公は耳飾りを作ったことで、十人の夫人候補の女性たちから重んじられた。
- (イ) 薛公は王が最も美しい耳飾りを与えた女性を夫人にするように王に進言した。
- (ウ) 薛公は以前から自分を重んじてくれていた女性を夫人とするように王に進言した。
- (エ) 薛公は王が夫人にしそうな女性に、最も美しく作った耳飾りを与えた。

出典

『韓非子』外儲説右第三十四

戦国時代末期の法家の代表的思想家・韓非の編んだ二十巻本。韓非は儒家の仁義・聖人による政治ではなく、法による富国強兵策を韓王に提言したが、受け入れられなかった。のち、彼の説は秦の始皇帝に採用され、天下統一の思想的バックボーンとなった。しかし、秦の天下統一以前に、秦の宰相李斯に嫌われて、死に追い込まれた。

を置き以て夫人と為さんことを請はんと欲す。王之を聴かば則ち是の説王に行はれて、置かるる夫人に重んぜられん。王聴かざんば是の説行はれずして、置かるる夫人に軽んぜられん。先づ王の置かんと欲する所を知り、以て王に勧めて之を置かんと欲す。是に於て十の玉珥を為りて、其の一つを美にして之を献す。王以て十孺子に賦つ。明日美珥の在る所を坐視して、王に勧めて以て夫人と為さしむ。

解説

問一 「皆貴於王」の「皆」は「十孺子」を指し、これが主語である。「……にゝる」とあるから、ここは受身の

構文になっている。(皆が王に「貴ば」れた) という意味。注から「皆(＝十孺子)」が後宮の女性であることがわかるから、(王に愛された、王の寵愛を受けた) という意味になる。

訓読

薛公齊に相たり。齊の威王の夫人死す。中に十孺子有り、皆王に貴ばる。薛公王の立てんと欲する所を知つて、一人

問二 設問にある書き下し文を参考にして、読む順番に番号をふつていく。なお、ここでは「而」「於」「也」は置き字であり読まないから×をつけておく。

- ① ③ ② ④ ⑤ ⑦ ⑥ × ⑪ × ⑧ ⑨ ⑩ ×
 王 不 聰 是 説 不 行、而 輕 於 置 夫 人 也

- ③↑②は一字返るのでレ点、⑦↑⑥も一字返るのでレ点を付ける。
 ⑪↑⑩は二字以上離れて返るので一二点を付ける。よつて、③と⑦の左下にレ点、⑩に一点、⑪に二点、それぞれ付くことになる。送り仮名でミスをしないように注意深く仕上げていく。

問三 空欄の送り仮名に「ニ」とある。「ヲ」であるならば、空欄に入るのは目的語であり、答えは「十玉珥」となるが、「ニ」なので、王が誰に対して耳飾りを配ったのかを考えればよい。後宮にいた十人の夫人候補である「十孺子」を入れれば、三字という設問の指示にも適する。この部分は、本来ならば「賦三十孺子十玉珥」／十孺子に十の玉珥を賦つ」という文なのだが、目的語が省略されたもの。漢文では、しばしばこうした省略があるので、注意が必要である。

問四 基本的な書き下し。「美珥之」の「之」は格助詞なので、ひらがなにする。「所」にはレ点が付いているので、「所在」は「在る

所」と取り読みをする。「坐視」は熟語、下に置き字「而」があり、文が続いていくから、「坐視して」になる。

問五 まずは問題文の内容を確認していこう。前夫人が亡くなり、威王は新しい夫人（つまり正式なお后）を選ぶことになる。その際に、宰相の薛公は何を考え、どんな行動をとったか？ 薛公は、十人の夫人候補の中の一人を自分から王に推薦しようと考えた。その進言が聞き入れられれば、威王とその新夫人にとって自分はその重要な人間となるはずだからである。しかし、十人の候補の中から一人の女性を推薦するにあたって、失敗は許されない。もし「この女性を夫人にしよう」と王が考えているのとは別の女性を推薦してしまつたら、王には「余計なことを言うやつだ」と思われるし、進言が聞き入れられず、自分が推薦したのとは別の女性が夫人になってしまえば、自分の影響力が低下してしまうだろうことは容易に想像できる。そのため薛公は、まず王が誰を夫人にしたのかを知つた上で、王の意に沿う女性を推薦することにしたのである。

では、どうすれば王の意向を知ることができるだろう。そこで薛公は十個の耳飾りを用意する。ただしそのうち一つだけは、他と違って格別に美しいものにしたのだつた。これを王に渡して、十人の夫人候補に分け与えてもらえば、王は当然、最も愛する女性（すなわち夫人として最も大切にしたい女性）に、格別に美しい耳飾りを与えるはずだ。案の定、薛公のねらいどおりになり、薛公は次の日に最も美しい耳飾りをつけた女性を見て、王が夫人

候補として考える意中の女性を知り、彼女を王に推薦して夫人とさせたのである。

選択肢の中で、この内容に合致するのは(イ)だけである。(ア)は薛公が「十人の夫人候補の女性たち」すべてから重用されたとする点、(ウ)は「以前から自分を重んじてくれていた女性を」が、(エ)は薛公が耳飾りを与えたとしている点が、それぞれ誤りである。

全訳

薛公は斉国の宰相であった。齊の威王の夫人が死んだ。後宮の中に十人の女性がおり、皆王に愛されていた。薛公は王が夫人にしようと思っている人を（内々に）知って、その人を推薦して夫人にするがよいと進言しようと思っていた。王が提案を受け入れればその時には自分の説は王に重んぜられ、新夫人にも尊重されることになる。一方、王の気に入らない人を進言して）王が聴かなければ自分の考えは通らなくなり、新夫人にも軽んぜられよう。（そのためにも）まず王の意中の女性を知り、その人を王に勧めて夫人にしようと思ったのである。そこで（薛公は）十組の耳飾りを作り、その中の一つを格別に美しくしてこれを王に献上した。王はそれを十人の女性に分け与えた。翌日薛公は美しくした耳飾りを付けた女性を見て、その女性を王に勧めて夫人とさせたのだった。

解答

- 問一 寵愛されること。
- 問二 王不_レ聴_カ是_ノ説不_レ行_{シテ}、而輕_ニ於置_{カル}夫人_ニ也
- 問三 十孺子
- 問四 明日美珥の在る所を坐視して
- 問五 (イ)

徹底復習 古文・漢文
解答用紙

禁無断転載



※解答は、濃く、はっきりと記入ください。

古・助動詞①

一 ZICAI-21C1

ZICAI-21D1

総得点
35 / 50

⑤

問一

1
5/8

1/2 A = ↓ せ

2/2 B = させ

1/2 C = ↓ さすれ

2/2 D = せ

問二

2
3/3

D

直前の「捕へ」は八行下二段活用動詞「捕ふ」の未然形なので、助動詞「ず」はつかない。
下二段活用動詞「捕ふ」が上接しているので、助動詞「とす」を選び、直後に未然形接続の助動詞「む」があるので、未然形「させ」と活用させる。

選んだ助動詞はよいが、直後の「て」は連用形接続の接続助詞なので、連用形「させ」とする。①

Dのように尊敬語を二つ重ねたものを最高敬語といい、地の文では天皇・皇后・中宮・上皇などに対して使われる。

⑥

問二

3
6/8

3/4 (1) = ↓ たまひぬ ↓ 命令形

3/4 (2) = ↓ 参りつる ↓ 連体形

例) にならって、助動詞「ね」だけを抜き出そう。①

例) にならって、助動詞「つる」だけを抜き出そう。①

⑦

問一

4
3/6

1/2 A = ↓ ぬれ

2/2 B = る

0/2 C = ↓ る

例) 直後に接続助詞「ば」があるので、未然形と已然形が考えられるが、和歌であることに着目して、字数から、一字の「な」と判断する。①

完了の助動詞「り」はサ行変格活用動詞と四段活用動詞にのみつく(「来」にはつかない)。
[C]はカ行変格活用動詞「来」に接続しているので、(カ変動詞につかない「り」以外の「き」か「ぬ」)を選び、直後が体言なので「き」の連体形「し」か「ぬ」の連体形「ぬる」のどちらかだが、「来し方行く末」で(過去と未来)の意を表す慣用語であることから、「し」に決定する。

添削者より 答案感想欄

学年「一二三卒など」
志望校
解答時間 分
評書 教科書・参考書などを使って解きましたか (はい/いいえ)

助動詞 苦手です。

解明者名 鈴木

※解答が終わってから記入しましょう。

二 ZICAI-21C2
問一 才

昔は十二支を用いて時刻や方角を示した。真夜中(午前零時)の前後一時間「子」と定め、約二時間ずつで一刻と区切っていく。「正午(まさに午の刻)」が昼の十二時となる。

問二

① 行方不明になってしまった。
② 食べさせて
③ めたり
失せぬ

↑「語らばれて」の「れ」が、八行四段活用動詞「語らふ」の未然形に付いているので、助動詞「る」の連用形。
この「せ」はサ行下二段活用動詞「失す」の連用形活用語尾。「造らする」の「する」が、ラ行四段活用動詞「造る」の未然形に付いているので、助動詞「す」の連体形となる。

問三

① 行方不明になってしまった。
② 食べさせて
③ めたり
私を造った僧である。

「失せ」についても訳出しよう。①
「ここでは(姿を消す・いなくなる)などと訳す。」
「せ(サ行変格活用動詞「す」の未然形)も訳出しよう。①
この前に「彩色・環珞をば(彩色や飾りは)」とあるので、「(することが)などと訳す。」

問四

専当法師が造った地蔵菩薩が、法師を捕えた鬼たちに、許すように言ったから。
自分も造ってくれた、という法師の行為に対する(恩返し)として助けてくれたことを明確にしよう。①